

資質・能力を視座とした教育課程の分析

奥 山 茂 樹*・廣瀬 真 琴**

(2016年10月25日 受理)

Analysis of the curriculum placing quality and ability in perspective

OKUYAMA Shigeki, HIROSE Makoto

要約

本研究では、教育課程の現状について①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、④人間性といった資質・能力の観点に基づいて事例を分析し、各学校が教科・領域等の教育課程を編成する上で、育成を目指す資質・能力の観点からどのような変革が必要となるかについて論考した。

その結果、知識・技能は、各教科を含めて教育課程全体ではぐくむ計画を立てている傾向にあること、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性は、各教科以外の領域等ではぐくむ計画を立てている傾向にあることが分かった。要因として、我が国が社会的要請を踏まえながら知識・技能の育成を重視してきた歴史的背景や、学習指導要領がコンテンツ・ベースで記述されてきた経緯が挙げられる。こうした背景や教育課程の記述傾向といった現状を踏まえて、これから時代を見据えて、子どもたちに資質や能力をはぐくむ教育実践を展開するために、知識・技能の育成に関する蓄積を生かしながら、各学校が、カリキュラムをマネジメントしていく必要性と教育課程の見直しの手順・方法について論じた。

キーワード：資質・能力、教育課程、カリキュラム開発

* 鹿児島大学教育学系 准教授
** 鹿児島大学教育学系 准教授

1. 研究背景と目的

グローバリゼーションの進展は、世界の国々にとって、協働による共生を志向する時代へのシフトを意味してきた。例えば、地球規模での環境問題や戦争難民といった、ある一国では解決を図ることが困難な国際レベルでの問題が、国家間で、解決の枠組みや方向性、プロセスの共有を希求してきている。情報技術等は、指数関数的に発展しつつある（カーツワイル 2007）。これは、当該領域や、それを活用する資料域において、問題の発見や発生と、それへの対応や解決速度が増していることを意味している。

両者の進展は、まさしく問題予測不可能な社会の到来を示唆している。では、これからの中学校教育において、子供たちに、どのような資質・能力を身に付けさせが必要であろうか。この点について、わが国の動向を確認する上で、平成28年8月の中央教育審議会教育課程部会「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」が参考となろう。そこでは、これから時代に求められる資質・能力として、「生きてはたらく知識・技能」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」が示されている。

「生きてはたらく知識・技能」というコンテンツ・ベースの学力と「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」というコンピテンシー・ベースの学力とを相互に関連させながら育成することにより、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」のコンピテンシーとして示されている学力を涵養していくことが、示唆されている。

このような方針を受け、一方で、学習指導要領の枠組みや表記が修正されていくと考えられる。安彦（2014）忠彦は、現在までの学習指導要領において、各教科等・各学年の教育すべき「内容」が「目標」記述の十倍から数十倍も書かれていることを指摘し、「学習指導要領」の構造・体裁を変える必要性を提起している。

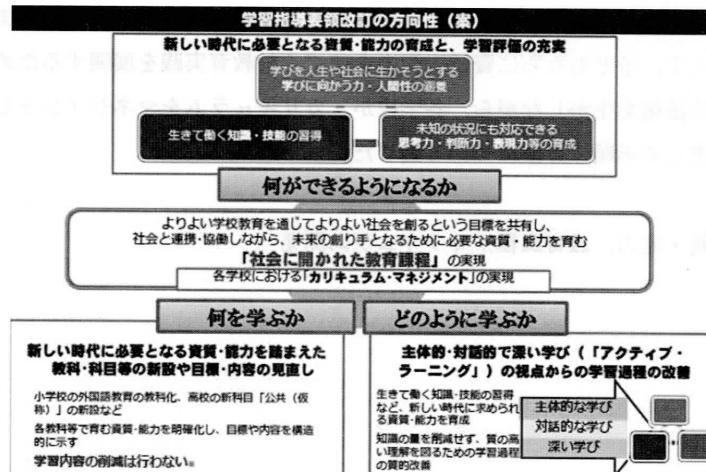


図1 学習指導要領の方向性（案）

こうした学習指導要領の修正を見据えつつ、各学校が自らの教育課程に資質や能力を反映させ、長期的な教育計画を立案することが求められよう。どのような教育課程を編成するかといった具体的な改善が必要であることは、論を俟たない。例えば、育成すべき資質・能力の観点から教育課程を編成することについて、山元他（2016）は、教育課程の様式の中に、育みたい資質や能力、及びその学習プロセスを記す欄を設けること等を提案している。こうした教育計画を踏まえて、各学校教育において教育実践を展開し、その評価と改善を積み重ねるといったカリキュラム・マネジメントの実践がなされる必要がある。

そこで本研究では、教育課程の現状（実施状況）を事例的に確認した後、教科・領域等の教育課程を編成する上で、育成を目指す資質・能力の観点からどのような変革が必要となるかについて論考することを試みるものである。

2. 研究方法

本研究では、鹿児島県A町の小中学校の教育課程を整理・分析した。その際、各学校の教育課程を①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、④人間性といった資質・能力の観点に基づいて整理した。これは、中央教育審議会教育課程部会「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」に示された理念である。多くの先行事例が、この観点を踏まえていると推察されるため、各学校の教育課程を分析するに適していると考えた。

分析の対象としたのは、4つの公立学校である。いずれの学校も、鹿児島県の特色とも言える小規模校であり、豊かな自然、文化、歴史等の地域資源に恵まれ、地域の教育力が高いといった特色を有しており、対象として適していると判断した。

上述した観点に基づき、小学校は、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動について、中学校は、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動について、それぞれの年間指導計画等の記述内容を確認した。上記の4観点に関連する記述がある場合は、その概要を整理した。

3. 結果

3.1. 各事例における具体

以下の表は、A町の2小学校及び2中学校を抽出し、先の観点に基づいて教育課程を整理した結果である。

表1 資質・能力から整理したB小学校の教育課程

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
各教科	単元・題材名。国語、算数において学力向上の記述。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
道徳	主題名・内容項目。	特記事項なし。	教科・領域等との関連図。	指導内容の重点項目。
外国語活動	テーマ及び学習内容。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
総合的な学習の時間	目標、学習活動に身に付けなければならない知識・技能の記述。	学習活動、教師の支援による問題解決学習の記述。	配慮事項に「自分の興味に基づいて課題を設定し、自分なりの方法で調べたか」などの記述。	配慮事項に「友達との協力」や「外部講師への思いやり」の記述。
特別活動	学校行事のねらいに身に付けなければならない知識・技能の記述。	一部の学校行事のねらいに表現力の記述。	学級活動の年間指導計画に望ましい人間関係の育成に関する記述。	特記事項なし。

表2 資質・能力から整理したC小学校の教育課程

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
各教科	単元・題材名のみ。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
道徳	指導計画には主題名・内容項目。	特記事項なし。	教科・領域等との関連図。	各学年の指導案。(2事例ずつ)
外国語活動	単元・題材名、表現・語彙、活動例についての記述。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
総合的な学習の時間	主題名、ねらい、活動内容、育てたい技能、他教科との関連の記述。	課題解決学習の進め方と子供の追究の姿、育てたい力の記述。	特記事項なし。	育てたい力にいろいろな人の関わり方についての記述。
特別活動	学級活動は題材名。学校行事はねらい、当日の流れ。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。

表3 資質・能力から整理したD中学校の教育課程

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
各教科	単元・教材名、指導目標。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
道徳	主題名、資料名、ねらいのみ。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
総合的な学習の時間	全体計画に身に付けてさせたい力の記述。	全体計画の評価の欄に、学習内容ごとに発想力・表現力・実践力の評価観点の記述。	全体計画に主体的・意欲的な態度の記述。	特記事項なし。
特別活動	学級活動は題材。学校行事はねらい、方法等の記述。	学校行事の一部に表現力に関する記述。	学校行事の一部に主体的な態度、自己肯定感等の記述。	学校行事の一部に豊かな人間性に関する記述。

表4 資質・能力から整理したE中学校の教育課程

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
各教科	単元・教材名、学習内容の記述。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
道徳	主題名、資料名、内容項目、ねらいの記述。	特記事項なし。	学校行事との関連図。	特記事項なし。
総合的な学習の時間	全体計画にねらい、学習活動の記述。	特記事項なし。	全体計画に教科、道徳、特別活動との関連図。	特記事項なし。
特別活動	学級活動は題材名。生徒会活動は目標、活動内容。学校行事についての記述なし。	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。

4. 考察

4.1. 記述の傾向

表5は、上述した4校の記述結果を集約したものである。特徴を捉えれば、教育課程の教科や領域等において4校すべてで確認できた（外国語活動は小学校のみ）のは、知識・技能である。教育課程において全体的に記述が少ないので人間性であり、道徳と総合的な学習の時間で記述が確認された。思考力・判断力・表現力等については、総合的な学習の時間と特別活動において、記述が確認された。学びに向かう力については、道徳、総合的な学習の時間、特別活動であった。

整理すると、知識・技能は、各教科を含めて教育課程全体ではぐくむ計画を立てている傾向にあること、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性は、各教科以外の領域等ではぐくむ計画を立てている傾向にあることになる。

表5 資質・能力から整理した各学校の教育課程

項	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力	人間性
各教科	B C D E	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
道徳	B C D E	特記事項なし。	B C E	B C
外国語活動	B C	特記事項なし。	特記事項なし。	特記事項なし。
総合的な学習の時間	B C D E	B C D	B D E	D
特別活動	B C D E	B D	B D	特記事項なし。

この傾向は、いくつかの解釈が可能である。1つは、各学校が資質や能力に応じて、特に強調して育成する場面を想定しているという解釈である。もう1つは、知識・技能の育成に傾斜しているという解釈である。もう1つは、既存の教育課程の教科や領域等において、対応関係が構築

しにくい資質や能力が存在するという解釈である。そして最後が、各学校で利用している教育課程のフォーマットに、これら3観点やそれとの対応を記す部分が存在していないという解釈である。

これらの解釈のいずれかに起因したというよりも、これらの傾向は、複合的な理由によって生じていると考えられる。我が国が、高度経済成長と相まって、社会的要請を踏まえながら知識・技能の育成を重視してきた歴史的背景を踏まえれば、各学校がそれに呼応するように教育課程を編成してきたと考えられる。こうした背景や教育課程の記述傾向といった現状を踏まえて、これから時代を見据えて、子どもたちに資質や能力をはぐくむ教育実践を展開するために、知識・技能の育成に関する蓄積を生かしながら、各学校が、カリキュラムをマネジメントしていく必要があろう。

4.2. 各事例における具体と改善の方向性の検討

カリキュラム・マネジメントを試みるための第一歩として、表1～表4から各学校の教育課程編成における各教科・領域の特徴と、その改善の方向性を検討していく。

各教科の年間指導計画は、B・C 小学校、D・E 中学校とも時系列での単元名・題材名を中心とした記述になっており、教師がどの時期に何を取り上げるかを軸に構成されている。D・E 中学校の2校は、指導目標や学習内容の記述も見られたが、簡潔な表現にとどまっている。また、B 小学校の国語・算数の教科の年間指導計画には、特に基礎・基本の定着に重点をおく学力向上を取り上げているが、育成すべき資質・能力を意識した教育課程の編成には至っていない。

道徳の年間指導計画においても、主題名、資料名、内容項目、ねらい等の記述が見られたが、教科と同じく、どの時期に何を取り上げるかに重点がおかれている。その中でも B 小学校では、表6に示すとおり各教科や学校行事等との関連を踏まえ総合単元的道徳教育構想図を示しており、道徳を中心として総合的に学びを深めていく教育課程が編成されている。また C 小学校では、各学年の道徳指導の構想図とともに、年間で重点的に取り組む主題について学習指導案が示されており、組織として道徳的実践力の育成を図る態勢が整えられているといえる。

しかしながら、表5の結果を踏まえるに、多くの学校においても、資質・能力の観点から、各校の教育課程編成については、その進展を期する必要がある。はぐくみたい資質・能力の観点から教育課程を捉え直すことで、学校全体でその資質・能力を授業場面での具体的な児童生徒の姿として設定することができ、教員だけでなく児童生徒とともに共通理解を持つことで、各教科・領域を相互に関連付けながら学びを深め、それぞれの目標が達成されるのではないかと考える。

表6 B 小学校の総合単元的道徳教育構想図【3・4年】

（1学期）

～思いやりの心で友達と接しよう～

【国語】 ・よりよい学級会をしよう	主題名「思いやり・親切」 ・思いやりの心を持とう	(行事等) ・入学式
----------------------	-----------------------------	---------------

【社会】	・見つめよう わたしたちのまち ・ポスターや絵地図にまとめよう	・相手の立場を考えよう 中心資料 「心と心のあく手」	・始業式 ・各健康診断 ・いじめを考える週間 ・1年生を迎える会 ・春の1日遠足 ・C小学校との交流 ・校内水泳大会 ・終業式
【図工】	・1年生を迎える会	・相手の立場や気持ちを理解して、進んで親切にしようとする心情を育てる。	
【体育】	・かけっこ	1学期の資料 4月「しつれいおばさん」 7月「プリントのおうち」	
【学級活動】	・中学年になって ・図書室のきまり ・仲間づくり		

外国語活動の年間指導計画は、B小学校では、時系列でテーマ及び学習内容が示され、教師がどの時期に何を取り上げるかに重点をおいた記述である。一方、C小学校では、単元・題材名とともに、取り上げるべき主な表現、語彙、活動例が示されており、児童が何を学ぶのか、知識・技能を意識した教育課程の編成がされている。

総合的な学習の時間では、教科及び他の領域と比較し、いずれの学校においても、はぐくみたい資質・能力を意識した教育課程を編成している。特にC小学校においては、表7に示すとおり、年間計画の中に育てたい力が明記されている。この要因として、総合的な学習の時間の創設の経緯や趣旨等に寄るところが大きいと考えられる。

表7 C小学校4年生総合的な学習の時間年間計画

学年テーマ：郷土を見つめよう

項	月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
予想される子どもの活動と意識	略											
他教科との関連	略											
育てたい力	(情報の調べ方) 資料の取捨選択、インターネットの活用法 (記録の仕方) メモの取り方、ノートの書き方、デジカメの操作法 (まとめ方) 感想文・報告する文章・手紙・新聞の書き方 (コミュニケーション) インタビュー・適切な対話の仕方 (発表の仕方) 発表の仕方、聞き方・話合いの仕方											

また、D中学校の総合的な学習の時間の全体計画には、身に付けさせたい力として、①他者と関わる力（コミュニケーション能力）、②情報の収集・分析・選択する力（情報収集・活用力）、③「なぜだろう」の力（課題発見力）、④伝える力（表現・伝達力）、⑤発想の豊かさ、⑥基本的なマナー・ルールが設定されている。一方、全体計画の評価では、その観点として、①主体的・意欲的な態度、②発想力、③表現力、④実践力が設定されている。はぐくみたい資質・能力を意識した教育課程の編成に努めており、他校の参考になりうると考える。

特別活動では、学級活動においては、時系列で題材名が示されており、教師がどの時期に何を取り上げるかを重点に記述されている。また、児童会・生徒会活動については、目的や組織、年

間の活動計画等を、クラブ活動では、目的や学習内容等が記述されている。学校行事では、目的や手順方法等の記述が中心となっているが、D中学校においては、学校行事の一部ではあるものの、その行事の基本的な考え方を示しており、育成すべき資質・能力を意識した事例として、以下教育課程から、一部分を抜粋する。

Dフェスタ

1. 目標（略）

2. 組織（略）

3. 基本的な考え方

(1) 児童生徒について

①日頃の学習の成果を発表する場として、合同で文化祭を開催することで、運動会等で培ってきた異年齢集団をさらに発展させ、互いの仲間意識とふるさと意識を高めさせ、各々が持っている社会性を育ませることで、児童生徒相互の成長を図る。

②共通の目標に向かって取り組む中で、多様な価値観に触れ、幅広い年齢層で活動する機会とする。

③相互の交流を通して、多くの芸術に触れる機会を増やすことで、知的好奇心を充実させ、豊かな人間性を養う。

④小6～中1の接続に努め、中1ギャップの解消を図り、スムーズな中学校生活への移行を目指す。

(2) 地域について

①教員や親をはじめとする大人全員で子供の成長に関わる機会とすることもでき、身近な大人に「見守られている」「認められている」という児童生徒の自己存在感を高める。

②地域の人々の活動を鑑賞し、地域のよさや楽しさを体験・共有することで、地域への理解を深める。

③開かれた学校を目指し、学校を中心とした地域活性化への一助とする。

(3) 職員について

①互いの良さを生かした指導を行うことで、教員相互の指導力の向上を図る機会とする。

②児童生徒の情報を互いに共有することで、児童生徒の姿を多様な視点で捉え、より深い児童生徒理解に役立てる。

以下略

※ 下線は筆者が加筆した。

下線部分は、この学校行事においてはぐくみたい資質・能力に関わる箇所を表している。他の学校行事においても設定していくことが期待される。課題として、身に付けさせたい力と評価の

観点の関連性・整合性や、評価の観点における、例えば発想力とはどのような力かなど、定義付けが必要と思われる。

5. 展望

本研究では、教育課程の現状（実施状況）について①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力、④人間性といった資質・能力の観点に基づいて事例を分析し、各学校が教科・領域等の教育課程を編成する上で、育成を目指す資質・能力の観点からどのような変革が必要となるかについて論考した。

その結果、知識・技能は、各教科を含めて教育課程全体ではぐくむ計画を立てている傾向にあること、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性は、各教科以外の領域等ではぐくむ計画を立てている傾向にあることが分かった。要因として、我が国が社会的要請を踏まえながら知識・技能の育成を重視してきた歴史的背景や、学習指導要領がコンテンツ・ベースで記述されてきた経緯が挙げられよう。こうした背景や教育課程の記述傾向といった現状を踏まえて、これから時代を見据えて、子どもたちに資質や能力をはぐくむ教育実践を展開するために、知識・技能の育成に関する蓄積を生かしながら、各学校が、カリキュラムをマネジメントしていく必要がある。

そこで、今後、各学校においては、次の観点から教育課程の見直しを図る必要があると考える。

まず、育成すべき資質・能力について、校内研修などの場を設定し、全職員で共通理解を図る。その際は、中央教育審議会教育課程部会「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」に示された理念である①知識・技能、②思考力・判断力・表現力等、③学びに向かう力・人間性といった資質・能力の観点を基本とし、学校の実情や児童生徒の実態、地域・家庭の実態や願いを整理・分析した上で、自校の育成すべき資質・能力について検討が必要となる。先進的な実践校として、静岡大学教育学部附属浜松小学校では、子どもは事象から課題を見つけ出し、解決していく能力（感じる力、見通す力、追究する力、表現する力）を付け、その学びの中で、資質（自律性、関係性、有能さ）は学びの基盤となって高まると考え、各教科、総合的な学習の時間を中心として資質・能力を中心に据えたカリキュラムの開発に取り組み、研究成果を上げている（2016）。

次に、既存の教育課程の教科や領域等において、対応関係が構築しにくい資質や能力が存在することから、各教科、領域等における重点的な資質・能力を設定する。上述の3観点は、教科、領域等すべてにおいて同様に設定する必要はないと考えられる。教科や領域等にはそれぞれの本質や目標があり、これらの資質・能力に対してすべてが対応できるとは、限らない。本調査結果からも、総合的な学習の時間などにおいて思考力・判断力・表現力の資質に関する記述が見られるように、資質・能力は、特にある領域で重点的に育成を図るという場合も考えられる。各学校で設定した育成すべき資質・能力の観点で、すべての教育課程を見直し、どの教科・領域で、どの資質・能力を重点的に育成するか、焦点化を図ることが必要であろう。そのために、各学校に

おいて、現在の授業や単元、学校行事等で実践されていることを授業研究等で整理・分析しながら、資質・能力をはぐくむという観点から、各教科や領域等の有機的な関係構造を再構築することが求められよう。

最後に、各学校で利用している教育課程のフォーマットに、これら3観点やそれとの対応を記す部分を明確にするということである。常に教師が意識を共有し、資質・能力を中心に据えたカリキュラムを推進するためには、教育課程に明確に位置付けることが必須である。

今後の課題として、こうした変革のプロセスやカリキュラムのマネジメントシステムを構築するプロセスや、そのシステムの具体を、明らかにする必要がある。鹿児島大学教育学部附属特別支援学校(2014)等、現在、学校で行われている教育活動をもとに、自校のカリキュラムを、授業研究等を通して実際的に批評し、資質・能力をはぐくむカリキュラムの変革を進めている事例を分析していく必要がある。

参考文献

- 安彦忠彦 (2014) 「コンピテンシー・ベース」を超える授業づくり、図書文化社、pp.45-46
- 鹿児島大学教育学部附属特別支援学校 (2014) 子どもの「学び」から始めるカリキュラム開発Ⅰ一日々の授業と教育課程をつなぐ授業研究の在り方ー、研究紀要第20集
- 文部科学省 (2016) 次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ（案）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/1376580.htm (2016年9月5日確認)
- 奈須正裕・江間史明編著 (2016) コンピテンシー・ベースの授業づくり、図書文化社
- ポスト・ヒューマン誕生 - コンピュータが人類の知性を超えるとき - (2007) レイ・カーツワイル著、井上健監訳、日本放送出版協会
- 静岡大学教育学部附属浜松小学校 (2016) 資質・能力を中心に据えたカリキュラムの構想、明治図書
- 高木展郎 (2016) 「これから時代に求められる資質・能力の育成」とは、東洋館出版社、pp.43-47
- 山元卓也・廣瀬真琴・下古立浩・奥山茂樹 (2016) 「特別活動」における教育課程の変革に関する一考察